



研究論文 (Articles)

就労移行支援における精神・発達障害者の 対話的ビブリオセラピー体験の意味づけ¹⁾

～体験と参加者の主観的変容の結びつき～

山下 朋 美

(大阪大学大学院人間科学研究科)

Making Sense of the Experience in Interactive Bibliotherapy for Employment Transition Support: The Link between the Experience and Inner Transformation of Participants with Mental and Developmental Disabilities.

YAMASHITA Tomomi

(Osaka University Graduate School of Human Sciences)

Through an examination of the narratives of how participants experienced 'BOOK & TALK'; an initiative implementing Interactive Bibliotherapy for participants engaging in employment transition support, the study sought to hypothesize the significance of Interactive Bibliotherapy as a programmatic intervention within employment transition support facilities. Individual semi-structured interviews were conducted with 7 participants who attended all sessions. Analysis yielded 4 categories and 14 subcategories representing the elements of Interactive Bibliotherapy, alongside 4 categories and 12 subcategories delineating its outcomes. The interrelation between these elements and outcomes was discerned within idiographic narrative. Results suggest that Interactive Bibliotherapy promotes self-understanding and self-affirmation which may help participants while looking for jobs, serves as a stress-relief platform, and also help promoting a flexible mindset necessary for long-term employment. While having limitations in the research design, participants' subjective transformations indicate the meaningful significance of integrating Interactive Bibliotherapy into employment transition support.

就労移行支援事業所を利用する精神・発達障害者による対話的ビブリオセラピーを活用したプログラム体験の語りから、精神・発達障害者の就労移行支援における対話的ビブリオセラピー体験の意味づけを明らかにすることを目的とする。プログラムの参加者7名に対して半構造化面接を行い、類型化を行った結果、対話的ビブリオセラピーの体験自体として4個のカテゴリー、13個の概念が抽出され、対話的ビブリオセラピーによる参加者の主観的変容として4個のカテゴリー、12個の概念が抽出された。体験と参加者の主観的変容の結びつきについて、個性記述において示した。その結果、プログラムが自己理解及び自己肯定の感覚を促進することを通して、就職活動への姿勢の変容に影響すること、心理的負荷を軽減しうること、就労時に役立つ柔軟な捉え方を促すことが仮説として示された。研究デザイン上の限界はあったが、参加者の主観的変容から、就労移行支援における対話的ビブリオセラピーの活用可能性が仮説的に示された。

Key Words : employment transition support, interactive bibliotherapy, support for people with Mental and Developmental disabilities

キーワード：就労移行支援・対話的ビブリオセラピー・精神・発達障害者支援

1) 当論文は大阪大学人間科学研究科における、博士論文の一部を改変したものである

第1節 目的

1-1) 就労移行支援事業所の利用者が抱える問題

就労移行支援は、「就労を希望する障害者につき、厚生労働省令で定める期間にわたり、生産活動その他の活動の機会の提供を通じて、就労に必要な知識及び能力の向上のために必要な訓練その他の厚生労働省令で定める便宜を供与すること」（厚生労働省、2005）であると定められている。障害者の就労においては、就労継続率の低さが課題である（高橋・鈴木、2019）。特に精神・発達障害者の就労継続を妨げる要因の一つに、自尊心の低さが挙げられる。Van Dongen (1996)によると精神障害者のうち、無業状態の者はそうでない者と比較して自尊心が低い。低い自尊心はうつや統合失調症などの精神症状と関連しており、(Orth & Robins, 2013; Romm et al., 2011) 自尊心の向上が精神障害の症状を軽減することが示されている (Jones et al., 2010; Orth & Robins, 2013)。発達障害者に関しても失敗や困難を経験しやすいことによる自尊心の低さが指摘されており、自尊心を高める支援が必要とされている (Newark et al., 2016; Cooper et al., 2017)。松為・菊池 (2006)によると、職業生活を継続させるために、障害者本人が自分の適性を見つけ、進路を決めることが必要である。そのため、障害者の就労支援において「自己決定の尊重、自信、自尊心の回復または維持などを意識した支援が必要である (松為・菊池, 2006, p.140)」。以上に述べたことから、精神障害及び発達障害を抱える人々の就労支援では自尊心に着目する意義があると考えられる。

近年、就労移行支援事業所の支援において、ストレングスモデルが着目されている。ストレングスモデルでは「すべての人は目標や才能と自信を有しており、またすべての環境には資源や人材や機会が内在しているとみる」(Rapp & Goscha, 2011 田中訳 2008, p.43)。ストレングスモデルに基づき、障害を持つ人の自信を高めるアプローチは重要とされており、就労移行支援事業所において、長所や強みに目を向け、自信を高める機会を作ることが重要であると考えられる。障害者の就労においては障害特性による困りごとを想定して、職場に求める配慮や、自己対

処できることを言語化する必要がある。そのために自己理解が鍵となる。小川 (2018) は発達障害者が職場での適切な配慮を受けるために、自己理解が必要であることを指摘している。精神障害者の就労支援においても自己理解の支援が必要であることが指摘されている (日本職業リハビリテーション学会, 2002)。更に、就職活動は心理的負荷がかかりやすい。澤田・岡田・光富・山口・井上 (1991) によると、職業の選択と決定は「心理的には自己の問い直しと将来の自己への賭けといった、不安と緊張に満ちた作業である」(澤田他, 1991, p.206)。精神障害者はストレスに対する感受性が強いことが指摘されている (Myin-Germeys et al., 2001)。また、発達障害者はストレスによる心理的負荷を感じやすい (Combs et al., 2015; Hirvikoski & Blomqvist, 2015)。このことから精神障害者及び発達障害者は、就職活動によるストレスを、健常者よりも心理的負荷であると感じやすいと考える。

このような現状から、精神障害者及び発達障害者の就労移行支援において、強みに焦点化し、心理的負荷を軽減しながら自己への気づきが得られるような支援が必要である。しかし、就労移行支援に関する先行研究の多くは、直接就労に必要なスキルの取得に関するものであり (柴野・狩野・高柳・瀬戸口, 2016; 八木, 2018)、心理的負荷や強みに着目した支援に関する研究が不足している。

1-2) 対話的ビブリオセラピーが援助資源になる可能性

対話的ビブリオセラピーは、「文章作品を用いて、ファシリテーターと参加者との間に治療的な相互交流（対話）をもたらし」(Hynes & Hynes-Berry, 2012)。そこでは「トレーニングを受けたファシリテーターが、指針に沿った対話を使い、参加者が文章作品に対する、認知的、感情的な反応を統合することを支援する」(Hynes & Hynes-Berry, 2012)。対話的ビブリオセラピーが目的とするのは、①心的イメージを刺激し豊かにすることによる、反応する力の向上、②自己理解の促進、③自分と他の物や人との関係性の明確化、④現実見当識の拡大、である。この4つの目的は自尊心と、気力を向上させるという目的に包括される (Hynes & Hynes-Berry, 2012,

p.15)。この目的のために、対話的ビブリオセラピーにおいては健康的な側面に焦点をあてる（Hynes & Hynes-Berry, 2012）。対話的ビブリオセラピーのプロセスは「①認識（‘読みものの中の何か’に意識をひきつける）②吟味（個々人の問題や気持ち的な反応を観察する）③並置（対話の中で、最初に浮かんだ思考についての新しい感情や新しいアイデアに焦点を当てることで、更に深いレベルで理解する）④自己適用（最後に洞察や印象について評価し、内的自己に統合する）」の4つである（Hynes & Hynes-Berry, 2012）。このプロセスの中で個人の強みを伸ばした結果起こるのは成長であり、望ましい性質を発展強化することが強調されている（Hynes & Hynes-Berry, 2012）。対話的ビブリオセラピーが自尊心を向上させることは海外の研究が示唆している（Karacan & Güneri, 2010; Pettersson, 2018）。対話的ビブリオセラピーは強みに着目するという点で、就労移行支援におけるストレングスモデルと相性がよいと考える。

また対話的ビブリオセラピーの特徴は、文章作品を使うことである。文章作品は触媒として機能すると言われており、この触媒は「肯定的、柔軟性、非強制」（Hynes & Hynes-Berry, 2012）という特徴を持つ。これらの特徴は、就職活動において自らの課題と直面することが多い就労移行支援事業所の利用者に、安心感をもたらすと考える。更に、山下（2021）及び Yamashita（2022）において、研究対象者の語りから、対話的ビブリオセラピーが自由で楽しい雰囲気であると体験されたことが示されている。本研究の対象者とは属性が異なるものの、これらの研究から、対話的ビブリオセラピーを就労移行支援に導入することで、心理的負荷を感じにくい雰囲気の中で、自分自身についての気づきを得ることが期待できる。このように就労移行支援の利用者にとって、対話的ビブリオセラピーが援助資源の1つとして活用できる可能性があると考ええる。

1-3) 本研究の目的

本研究においては対話的ビブリオセラピーを就労移行支援事業所内のプログラムの1つとして構成した『BOOK&TALK』（以下プログラムと呼称）を実

施し、プログラム参加者の体験についての語りから、精神障害者及び発達障害者の就労移行支援における対話的ビブリオセラピー体験の意味づけを明らかにすることを目的とする。本研究における体験の意味づけとは、対話的ビブリオセラピーの各ワーク及び全体的な体験をどのように捉え、どのように自身の中に位置づけ、体験主体がどのように変容したかについて、参加者の語りによって生成された意味のことであると規定する。体験の意味づけを構成する要素間の関連の中でも特に対話的ビブリオセラピーの体験自体（各ワーク及び体験全体の位置づけ）と参加者の主観的変容（プログラムの結果参加者自身が捉えた参加者の主観的变化）それぞれについて概念生成を行い、プログラムの体験が参加者の主観的な変化にどのようにつながるか、仮説的に明らかにすることを志した。

第2節 方法

2-1) 研究協力者

就労移行支援施設の利用者で計10回のプログラムの内、5回以上に参加した参加者の中で、インタビュー調査について事前に説明を受け、研究参加を承諾した計7名が参加した。発達障害・精神障害・身体障害のいずれかの診断をされている者でいずれも成人であった。研究協力者については以下「参加者」と呼称する。参加者の属性を表1に表す。インタビュー調査時をX年として、X+2年10月時点で参加者7名の内6名が就職している。

2-2) 研究実施場所・期間

プログラムはX-1年12月～X年9月まで、計10回、関西の中核都市にある就労移行支援施設で実施した。インタビュー調査についてはX年10月に実施した。

表 1 参加者の属性 (X 年 10 月時点)

参加者	年代	性別	障害分類	就労移行利用期間	活動段階
A	20代	男性	発達・精神	6か月	就職活動中
B	20代	女性	発達	1年1か月	就職活動中
D	20代	女性	精神	9か月	就職活動準備
E	20代	男性	身体・精神	7か月	就職活動中
F	40代	女性	精神・発達	11か月	就職活動準備
G	20代	男性	発達	9か月	就職活動中
H	40代	女性	精神	1年6か月	就職活動中

2-3) 手続き

(1) プログラムの内容

X-1 年 12 月～X 年 9 月までの期間で全 10 回のプログラムを構成し、月 1 回の頻度で実施した。1 回のプログラムの所要時間は 2 時間～2 時間半であった。プログラムはセミオープングループで、本就労移行支援事業所の利用者であれば誰でも参加可能であり、途中参加・退出も可能であった。プログラム参加予定者は事前に通所をするかについてシフトを提出した上で、当日に参加する際は挙手にて意思表示

をし、参加した。筆者がファシリテーターを担当し行った。Mazza (1999), Hynes & Hynes-Berry (2012) を参考に、第 1 回のプログラムにおいて扱いたいテーマについて、参加者の意見を集約し、それをもとに対話的ビブリオセラピーのトレーニングについてスーパーバイザーの資格を有する専門家（以下スーパーバイザーと呼称する）に相談のうえで各プログラムのテーマ及び計画を設定した。各プログラムのテーマ及び文章作品は表 2 のとおりである。

表 2 各プログラムの構成テーマと文章作品

	テーマ	文章作品	作者
プログラム1	オリエンテーション・未来を想像する	Go and open the door	Miroslav Holub
プログラム2	自分の望みについて	魔女の宅急便9: キキ、お正月を運ぶ	角野栄子
プログラム3	過去の自分を振り返る	コンビニたそがれ堂: あるテレビの物語	村山早紀
プログラム4	人との関係を見つめる	One pierce : 第93-94話	尾田栄一郎
プログラム5	自分の気持ちを見つめる	ハリー・ポッターとアズカバンの囚人: 第7章洋筆笥のまね妖怪	J.K. Rowling
プログラム6	自分の考え方をみつめる	ざんねんな努力: Stage1 とりあえず同じ服ばかり着てる男	川下和彦, たむらようこ
プログラム7	自分の生活について	The Armful	Robert Frost
プログラム8	達成したいことと困難について	STORY SKILLS FOR MANAGERS: The little Devils and the Treasure	Vicky Evans
プログラム9	自分の価値観について	最初の質問	長田弘
プログラム10	安らぐ瞬間について・まとめ	Leisure	W.H. Davies

(2) 手順

a) プログラム 対話的ビブリオセラピーを構成する一般的なワークとしては、文章作品を読む、対話、テーマに基づいた創造的執筆がある。また、創造的執筆における手法の1つであり、参加者が1文ずつ寄与し、その文章をつなげて詩にするワークである、グループポエムも利用されることが多い(Hynes & Hynes-Berry, 2012)。この手法は協同的執筆(collaborative writing)とも呼ばれ、グループの凝集性を高める点において効果的である(Golden, 2000; Hynes & Hynes-Berry, 2012)。以上を踏まえ、各プログラムについて以下のように構造化した。①チェックインワーク(ニックネームをつける)②セッションのルール確認③ウォーミングアップ(グループポエムのタイトルを各自考えるワークと感想の共有)④文章作品のワーク+対話(詩やストーリーを読み、全体で共有の時間を設け、ファシリテーターが各テーマに沿った質問をする)⑤創造的執筆+対話(各プログラムのテーマに関連して各自自由な形態で創造的な文章を書く。全体で共有の時間を設ける)⑦チェックアウトワーク(グループポエムの作成)。

ルールについては毎回提示したうえで、疑問があればプログラム外に個別に相談に来て問題ないことを伝えた。

b) インタビュー 半構造化面接の形式のインタビューをプログラムの最終回から1週間前後に行った。所要時間は29分～46分であった。個室において、個別に実施した。インタビューにおいては、対話的ビブリオセラピーの体験がどんな体験だったか、どのように影響を受けたか、プログラムの改善点があるかについて聴取した。

c) 倫理的配慮 筆者の所属大学において研究倫理審査に申請し、承認された。第1回目のプログラム開始前に、研究説明文書兼研究参加の同意書を配布し、研究参加は任意であり、研究中断も可能で中断による不利益はないこと、データの匿名化を行うこと等を口頭と紙面で説明し、承諾を得た後個人情報同意書に署名をもらった。

2-4) 分析方針

就労移行支援事業所の利用者を対象とした対話的ビブリオセラピーの実践は、国内外において前例がない試みである。そのため、効果検証ではなく、体験の意味づけを探索的に明らかにする質的手法が妥当であると考えた。プログラム自体の資料及びフィールドノートの内容は、インタビューデータを解釈するための文脈情報として使用し、インタビューの逐語録のみを分析対象とした。参加者の内的体験及び主観的変容を扱うため、参加者の通所率やプログラム外の活動については分析対象外とした。

語りの内容から、プログラムの体験自体についての語りと、参加者の主観的な変容についての語りについてそれぞれ概念を生成し、類型化した。類型化においては参加者全員のインタビュー内容を分析対象とした。体験自体についての概念は参加者によるプログラムの各ワーク及び、体験全体の位置づけについての語りを対象とし、参加者の主観的変容についての概念は、参加者がプログラムから受けた影響や自分自身がどのように変化したと感じるかについての主観的な語りを対象とした。分析方法の手順としては佐藤(2008)を参考に、語りについてオープンコーディングを行い、共通のテーマを持つ複数のデータ同士、データ内容とコード、複数のコード同士を比較対照し、プログラムの体験自体と参加者の主観的変容について概念を生成した。また、類型化によって簡潔に表した反面、文脈データが損なわれた。また、対話的ビブリオセラピーのどのような体験が参加者の主観的変容を促す可能性があるかについては、今後における、対話的ビブリオセラピーの実践に必要なデータであると考えた。そのため対話的ビブリオセラピーの体験自体と参加者の主観的変容の関連性について、体験やその過程の理解を目的として参加者の語りを個別に記述する、個性記述によって表現することで、再文脈化を図った。再文脈化にあたっては参加者の主観的変容をよく表すことを重視し、参加者4名の語りを選出した。

また、本研究の参加者の属性から、就労移行支援利用者のうち、精神障害者及び発達障害者に見られる対話的ビブリオセラピーの体験及び体験によって

得られた主観的変容に限定して以下に結果及び考察を提示する。

第3節 結果と考察

対話的ビブリオセラピーの体験自体と参加者の主観的変容についての概念を生成し、類型化した。類型化によって脱文脈化されたプログラムの体験自体についての概念と参加者の主観的変容についての概

念の結びつきについて参加者の語りを提示することで再文脈化を試みた。類型化については参加者全員の分析結果を提示し、再文脈化については対話的ビブリオセラピーの体験と、参加者の主観的な変容との結びつきをよく表していることを重視し、選出した参加者4名の語りを提示する。これらの結果を仮説的に提示する。

表3 対話的ビブリオセラピー体験の意味づけ（各ワーク及び全体的な体験）の類型

カテゴリー	概念	定義	代表例
内的要素	文章作品の主人公の視点を借りる n=3	文章作品の主人公を通して自分について考える	A89-90:引き出しが開かない文章作品は内省的すぎるんですね。客観的に主人公がいてそれを眺めてみたい。なやつの方が僕はあたりですね。その方が主人公をイメージできて、内省的になりすぎず客観的にみえる。
	触媒としての文章作品 n=4	文章作品が触媒となって自分の反応が引き出される	F17:なんかすごく優しい感じで引き出してもらったたのかもしれない。本という媒体？触媒を使ってたから、反応が引き出されやすくなってるのかなって。
	創造的執筆の自由度 n=3	創造的執筆の自由度が高く、何を書いてもいい状態	D24:当事者研究になると自分の性格とか障害とかについてみなきゃいけないんですけど、BOOK&TALKは想像上のことでもいいし、考えたければ自分のことでもいいし、書く自由度が高いかなと思っています。
	自由な表現 n=4	自由な表現ができる設定があること	B4:BOOK&TALKは想像力を働かせて自由に考えられるから、開放感があって童心に帰れるプログラムでしたね。気張らんでいいみたい。自由に表現していいから…
外的要素	ニックネームを通じた他者との接点 n=4	ニックネームを通して他の参加者の一面を知る	G18:ニックネームは、ほかの方の興味であったり、ちょっとした過去だったり、気分だったりの一端を垣間見れる気がしたので、その部分がよかったと思います。
	テーマのある対話 n=4	テーマがあることによる安心した対話を交わす	B37:何か話してって急に言われても何から話そうって思うんですけど、題材が決まったらその話ができるんで、実習のときも最初は見本作ってもらってそれをあとから作ることができたんで、最初になんかある方がいいかな、安心感もあったなって。
	グループポエムによる共同作業感 n=4	グループポエムによって得る、皆で一つの作品を作る感覚	G20:グループポエムは作品として完成度がそこそこある感じが、感銘を受けたというか。全体で一つの作品を作るっていう一つのあり方を見た気がしてよかったなと思いました。
場の要素	楽しい雰囲気 n=4	参加者やファシリテーターが持つ楽しい雰囲気	H20:BOOK&TALKは楽しくて明るい雰囲気でしたよね。Iさんがそういう感じだから。メンバーさんも色々な方いますけど、楽しそうに参加されていました。
	居心地の良い場 n=3	居心地が良い場であると認識する	E5:…フリートークやから、気兼ねなく参加できるのがいいなって言う感じ。居心地がいいと感じる場でしたね。
	現実から離れる n=3	現実から離れて、想像力を働かせるセッションの場	B5:…現実から離れられる。他のプログラムとはアプローチの仕方が違うっていうか…
複合的要素	肯定的な文章作品についての対話 n=3	文章作品について考えが違っても肯定的に受け止めあう対話	H13:同じものを読んで、自分の感じ方を間違いないと、一応受け入れてもらえる。私はこの意見を持っていいんだと思える。それを遠回しに小説とかを利用して皆に言ってもらえてるって感じ。
	違って当然な文章作品から生まれた対話 n=3	文章作品についての意見は違っていてもという前提をもつこと	F21:本に対して感じることもなんか一緒にわけがないっていう前提に私がいて、自由に意見を思っているから、自由に想像したり、感じたりできるから、意見が違って当たり前って思えるんですよね。
	誰かと一緒に体験する文章作品や創造的執筆 n=4	皆と一緒に読むことで、改めて考える体験	A34:普段本を読んで読み流すだけなんで、読んで何考えたかなって考えて改めて書くっていうのは、人に言われたり、こういうのじゃないとやらないことなんでそういうことをできるというのが貴重でしたね。

3-1) 対話的ビブリオセラピーの体験自体と参加者の主観的変容についての類型化

まず、対話的ビブリオセラピーの体験自体に関する語りについてのカテゴリー及び概念を以下表3に表す。各カテゴリーの命名として、文章作品や創造的執筆など、参加者自身の内部で起こっているとされる体験を内的要素、対話やグループポエムなど、

他者が関わる体験を外的要素、内的要素と外的要素どちらも含む体験を複合的要素、プログラムの場や空間を表す全体的な体験を場の要素とした。また、代表例の冒頭に、各参加者の発言をコード別に明示する目的で、参加者をアルファベットにて示し、コード番号を数字にて表した。各概念を何名の語りから概念を生成したかについてnを用いて示した。

表4 対話的ビブリオセラピー体験の意味づけ（参加者の主観的変容）の類型

カテゴリー	概念	定義	代表例
自己理解	自己理解の拡張 n=3	普段意識しない自分の側面に気づくことができる	A65:…自分の普段開けない引き出しがあくんですよ。それは普段意識して開けることもできない。普段引き出しがあることも忘れていたから難しいんですけど、BOOK&TALKの時は見つかる。
	自分の客観視 n=3	文章作品を通して自分を客観的にみて向き合える	B26:…物語を通して自分とか自分のこれまでを見るから、しんどくなく客観視できる。向き合わないといけない感じはしないけど向き合えるんですよ。
	自分の価値観の再確認 n=4	自分の感じ方や大事にしていることに改めて気づく	F2:考えてたかもしれないけど、それを書いて言語化することで、自分の感じ方とか、大事にしているものに、改めて気づくみたいな。だから、自己理解につながるのかなみたいな、私にとってはそんな体験でした。
気持ちの和らぎと活性化	自然体でいられる n=3	緊張せずありのままの自分でいられる	B28-29:…自然体でいられるみたいな感じ？…フランクな集会所みたいな。ギリシャのアゴラみたいな。そういう感じ。いろんな人の意見を聞けるから…。
	安心 n=3	考えなくていいことは考えなくてよい安心感がある	D25:…考えたくないことは考えなくても大丈夫って言うのは安心だったなと思います。
	リラックス n=3	柔らかな話が出来る、リラックスできる	E6:BOOK&TALKはフリーテーマなので、そういったところで柔らかな話ができましたね。リラックスできましたね。リラックスすることを僕は大事にしてるんで。
	楽しい n=6	プログラム中から帰宅後まで続く楽しい気持ち	D26:BOOK&TALKのプログラムがあると、その日すごい機嫌よくいれるんですよ。やっぱ楽しいんですよ。人と話せたり、想像力を巡らせて自分の意見を考えたりすることが。
	モチベーション n=3	プログラムが日々の活動を頑張るモチベーションにつながる	A77:もうシンプルに、楽しみと思ってきてました。今週はBOOK&TALKがあるぞ、やったー、楽しみと思ってその1週間頑張るぞって過ごすところがありました。
柔軟な捉え方の促進	視野が広がる n=3	人の意見を聞くことで自分の考えを精査し、視野が広がる	D11:人が考えたことを書いて、発表しているのを聞いて、でも私はこう思うなって、自分の内なる声と対話するというか…他の意見について考えることで、世界を見る目が広がったみたいな感じはします。視野ですね。
	違いの受容 n=4	相手との違いを受け止めることができる	F18:…どうなんだ！って突きつける感じじゃなく、それに対して自然に浮かび上がってくることを共有するみたいなことが、誰も傷つけない感じがして好きだなって思いました。だから人の反応も受け止められるというか。
自己肯定	引き出される自分の肯定 n=4	ワークで引き出された自分を受け止められる	F16:…ワークをすることによって自分って悪くないんだなって。BOOK&TALKで出てきた自分は、こんなに出てきて嫌やっていうのは全然なかったんですね。すごく優しい感じで引き出してもらったのかもしれない。
	自分を受け止める自信 n=4	自分の感じ方を受け止めてもらうことで自信につながる	H14:BOOK&TALKって、就職の時に何の役に立つって思ったんですけど、参加してみたら、自分の自信につながるプログラムだなんて思いました。周りも、そういうのもあるよね、みたいな感じで、自分もこういう考え方をしているんだって。肯定されるので、よかったです。

また、参加者の語りから対話的ビブリオセラピーの主観的変容について表現された語りを抽出し類型化を行い、代表例とともに表4に示した。カテゴリーについて、自分に関する気づきという変容を「自己理解」、ストレスや緊張が和らぐ、あるいは活力を得るような気持ちの変容を「気持ちの和らぎと活性化」、多様な考えに対する捉え方の変容を「柔軟な捉え方の促進」、自分について肯定できるようになるという変容を「自己肯定」と命名した。

3-2) 対話的ビブリオセラピーの体験と参加者の主観的変容の結びつき

対話的ビブリオセラピーの体験と参加者の主観的変容が、それぞれ具体的にどのように結びついているか、特に参加者の主観的変容として生成された各カテゴリーをそれぞれ最もよく表すと考える代表例を選出し、個性記述的な語りで表現することを試みた。以下の記述において《》はカテゴリー、＜＞は概念を表す。

(1) 《内的要素》の体験と、《自己理解》という参加者の主観的変容に関する語り

Aは、自分の無意識化にあることを考えつくことや、新しい自分を発見することに文章作品が貢献したことを以下のように語る。

A60-65…自分でも思いもしなかったことを思いつのが、『BOOK & TALK』の面白さだと思います。…新たな自分を発見する感じですね。真っ暗な部屋の中で、本を読むと違う所にぱっとスポットライトがあたるみたいな…自分の普段開けない引き出しが開くんですよ。それは普段忘れていたから意識して開けられないけど、『BOOK & TALK』の時は見つかる。

Aは‘引き出し’が開いたときの具体的なエピソードを、Armfulという詩を読んだ時のことを振り返って以下のように話す。

A66-71…荷物を持てるとつらいけど、その重さがないと立ってられへん。…恋人がいると他の女の子

と遊びに行けないじゃないですか。だけど安心して戻ってくる場所がある。そう思っていることがArmfulを読んでわかった。幸せやけど、自由じゃないなと思って

またAは‘引き出し’を開けることは面接で聞かれたことを考えて話すことにつながることや、面接の事前対策として発想力を広げることに役立ったことを以下のように話す。

A79-82 普段開けん引き出しを開ける訓練って就活にも役立つと思うんですよ。面接問答集の「最近感動したこと」なんて、面接問答集とにらめっこしても思いつかないんですよね。だから『BOOK & TALK』で、一旦その問題から離れて、本を読んで、感動したら、こんな風に自分今感動したんや、ってなるから面接問答集にまた戻って書けばいいわけ

Aはまた、内省的すぎない＜文章作品の主人公の視点を借りる＞ことで自分を客観視することができ、結果新たな自分を発見できたことを以下のように語った。

A89-92 引き出しが開かない文章作品は内省的すぎるんですかね。客観的に主人公がいてそれを眺めてるみたいなやつの方が僕はあたりですね。その方が主人公をイメージできて、内省的になりすぎず客観的にみえる。探しすぎると引き出しが開かないことがあるって思ってます。…無意識にふと、ていうのがいいのやと思います。

(2) 《外的要素》及び《場の要素》の体験と、《気持ちの和らぎと活性化》という参加者の主観的変容に関する語り

気持ちの和らぎについてBは＜テーマのある対話＞で題材があったことの＜安心＞を、自分が体験実習に行ったときに見本があったことの＜安心＞と合わせて以下のように語る。

B37 何か話してって言われても何から話そうって思

うんですけど、題材が決まったらその話ができるんで、多分実習のときとかも最初は見本作ってもらってそれをあとから作ることができたんで、最初になんかあるほうがいいかな、安心感もあったなって。

また、Bはプログラムにおいて想像力を働かせ、＜自由な表現＞をすることができたことから、童心に帰るプログラムであると感じた。＜現実を離れる＞ことで、自由に想像し楽しめたことや、気張らないでよい＜楽しい雰囲気＞の中で＜リラックス＞できたことを以下のように語る。

B2-4 学校に通っていたころは目の前のノートに向き合って、テストして、卒業をしてからも別のことで頭がいっぱいで、あんまり頭を自由にすることがなかったというか。…『BOOK & TALK』は想像力を働かせて自由に考えられるから、開放感があって童心に帰れるプログラムでしたね。気張らなくていいみたいな。自由に表現していいから、開放される感覚があって…楽しい感じがあったし、リラックスもできた。

B5-6 現実から離れられる。他のプログラムとはアプローチの仕方が違うっていうか、ここでは普段の自分とは違う自分でいられるから、自由に想像できたし楽しかったのかな…

Bはほかの参加者とのディスカッションの中で、自分も自由に発信していいと思えることで、＜自然体でいられる＞場所だと感じたことを以下のように語る。

B27-29 参加し始めは結構、他のメンバーさんの様子見とかやったんですけど、…結構ちっちゃいころから人と視点がずれてて。それでいい思いも、悪い思いもしたことあるんですけど、BOOK & TALK やったら、のびのび言っても、似たような意見とかあって、自分も自由に発信していいんやって思ったし。…自然体でいられるみたいな感じ？…フランクな集会所みたいな。ギリシャのアゴラみたいな。いろんな人の意見を聞けるから…。

気持ちの活性化についてBは、プログラムの＜楽しい雰囲気＞によって就職活動に関する取組みも頑張ろうと思う＜モチベーション＞になったことを以下のように語った。

B30-31: ニックネームで、みんなと自由な表現を楽しめるプログラムやから…日々の活動もプログラムもやりがいを感じるっていうか。次の月になったら、『BOOK&TALK』あるわ、楽しみ。履歴書作るの大変やけど今月も頑張ろう、みたいな感じ。…

(3) 《複合的要素》の体験と、《柔軟な捉え方の促進》という参加者の主観的受容に関する語り

Fは、＜媒体としての文章作品＞をもとにテーマに沿った質問をされ、引き出された反応を交わしあうことにより、違う考えを受けとめることができたことを以下のように語る。

F17-18 すごく優しい感じで引き出してもらってたのかもしれない。本という媒体を使ってたから、反応が引き出されやすくなってるのかなって。…文章に対しての反応が浮かび上がるって言うのが、これの意味かなって思う。「どうなんだ！」って突きつける感じじゃなく、自然に浮かび上がってくことを共有するみたいなことが、誰も傷つけない感じがして好きだなって思いました。だから人の反応も受け止められるというか。

Fは普段、正しさを主張したくなるが、プログラムにおける＜違ってて当然な文章作品から生まれた対話＞では＜違いの受容＞が促されたことを以下のように語る。

F20-21 普段は違う意見が出てきた時は、自分が正しいんだって言いたくなるけど、文章に引き出された気持ちの共有だと、それぞれの味わい方を、お互いに共有して、そういう考え方もあるよね、みたいなスタンスでいられて。…本に対して感じることもなんか一緒にわけがないっていう前提に私がついて、自由に意見を思っているやんって思ってるから、自由に想像したり、感じたりできるから、意見が違って

当たり前って思えるんですね。

更にFは、違いについて元々頭では理解できていたが、実際の対話の中で‘違うけど傷つけあわない’経験をしたことで、＜違いの受容＞を促進できたことを以下のように語る。

F19 人によって感じ方が違うって言うのは頭ではわかってるけど実際にそういうことを経験することによって、話の中でほかの人の違う考えの人のことも許そう、じゃないけど、違いを面白がるみたいなのところを、そういう自分の中の、違うけど傷つけあわない、そういうのを楽しむことを経験して、そういう見方を少し促進できたかもしれないです。

(4) 《複合的要素》の体験と《自己肯定》という参加者の主観的変容に関する語り

Hは＜肯定的な文章作品についての対話＞で自分の意見の言いやすさを感じ、また意見を言った後の相手の表情を見て自分の意見を伝えることに＜自信＞を持てたことを以下のように語る。

H11-12 題材自体に、ヒントが隠されている気がしましたね。こういう考え方もあるんだって思ったら自分も意見を言えるし。小説を読んで周りの意見とか聞いて面白いなと思って。…自分が話した時の表情見て大丈夫って思えたので、自信をつけられたかなと思います。

またHは、＜肯定的な文章作品についての対話＞を体験し、自分の意見を受け止めてもらえたことが＜自分を受け止める自信＞につながったことを以下のように語る。

H13-14 自分の感じ方を間違いじゃないと、受け入れてもらえる。この意見を持っていいんだと思える。それを遠回しに小説とかを利用して皆に言ってもらえてる感じ。BOOK & TALKって、就職の時に何の役に立つって思ったんですけど、参加してみたら、自分の自信につながるプログラムだなんて思いました。周りも、そういうのもあるよね、みたいな

感じで、自分もこういう考え方をしていいんだって。肯定されるので、良かったです。

更にHは文章作品があることにより、グループメンバーと遠慮をせず考えていることを伝えあえたことで自分の意見に自信を持てるようになり、そのことが就職活動でも活用されたことを以下のように語る。

H30-32 普段って自分の考えてることしかわからなくて。喋ってて、今のは配慮していわはらへんかったな、私もいえなかったなとか。小説だと違う世界に来れる。違っててもOKだから遠慮なく考えを話せるし、聞けるし。だから自信を持たせてもらった。面接に行ったときに、自分の考えを言ってだめなら相手が見る目ないだろうって思ってたんで。自分の根底にあるものを認めてもらえるのがわかると、面接時に良さが出せるって思えました。

第4節 総合考察

本研究は対話的ビブリオセラピー体験の意味づけとして、体験したことと、参加者が主観的に捉えた変容と、体験と参加者の主観的変容との結びつきをそれぞれ仮説的に明らかにすることを目的とした。そのため、一般化となるような表現を控えたうえで、対話的ビブリオセラピー体験の意味づけについての仮説を提示する。

4-1) 就職活動への姿勢の変容：文章作品による自己理解と、対話による自己肯定

抽出されたテーマ《自己理解》と《自己肯定》の2つから、対話的ビブリオセラピーが就職活動への姿勢に影響を与えることが仮説として示された。

まず《自己理解》という参加者の主観的変容が示されたことから、対話的ビブリオセラピーにおける目的の一つとされる自己理解の促進(Hynes & Hynes-Berry, 2012)が参加者に体験されたと考える。更に、参加者の語りから、就労移行支援施設の利用者にとっての自己理解は、面接で質問されたことに答える際の練習として、就職活動に役立つことが示

された。また、《自己理解》と、《内的要素》に関する個性記述から、文章作品が自己理解に関連していることが明らかになった。対話的ビブリオセラピーにおいての自己理解は自分の中にある、普段開けない‘引き出し’を開けることと表現されている。面接においても自分が想定していない質問をされる時に、同じように普段意識しない自分の‘引き出し’を開けることを迫られる。このように、対話的ビブリオセラピーにおいては新たな自分を発見することに留まらず、事前準備が難しく、面接においてその場で自分のことについて考え、話す練習として役立つことが示唆された。

更に、文章作品の中でも、内省を促すような文章作品だと無自覚な自己にはアクセスしにくいことが示されたことから、一般的に就労移行支援において提供される、自己理解を直接促すツールや講座だけでは意識下にある自分に気づきにくいことが示される。精神障害や発達障害を抱える人の就職活動において自己理解を深めることは、自分の特性や適性、自分に合った環境を事前に吟味し、就職先を検討することや、面接対策、就労後に安心して働くことにつながりうる。このように、対話的ビブリオセラピーを活用したプログラムにおいて、テーマに間接的にアクセスする文章作品を選定することが、就労移行支援において普段意識しない自分に目を向け、自己理解を促進する体験であったことが示唆された。

また、＜肯定的な文章作品についての対話＞が《自己肯定》を促したことから、対話的ビブリオセラピーが就職活動に寄与すると考えられる。本研究では自尊心(Self-esteem)と自己肯定(Self-affirmation)を区別して論じる。自尊心を測る尺度として頻繁に用いられる Rosenberg (1965) による自尊感情尺度の下位項目には、他者との比較をする項目が10項目中2項目存在する一方、本研究で抽出された《自己肯定》を構成する概念の代表例には他者比較が含まれなかった。そのため、本研究において、自己肯定という表現を採用した。《自己肯定》と《複合的要素》についての個性記述から、文章作品についての対話において、自分の考え方をグループメンバーに受け止められる体験や、率直な意見を伝えることができた体験から、自分の意見を持っていいと思え

るようになり、結果として面接へのチャレンジや、自己発信をすることにもつながったことが示唆されている。参加者の語りの内容から、文章作品の内容やグループメンバーの意見が、自分の意見を忌憚なく発信することを促していた。文章作品が対話の媒体となることで、自分の本心を話す心理的障壁が下がったのではないかと考える。また、グループメンバーの発信に加えて、文章作品が存在することで、参考のできる考え方の幅が増え、自分の本心を表現する言葉を探しやすくなったと考えられる。文章作品を読み、テーマに沿って話すという対話的ビブリオセラピー特有の構造は、うわべを取り繕う必要が少なく、今思っていることを共有しやすいと考える。このように、文章作品を土台として対話するという構造は、対話的ビブリオセラピーの利点となりうる。また、障害のある人々は自尊心が低い傾向にあるが、対話的ビブリオセラピーにおける文章作品を基にした対話により、＜自信＞を持てることが示唆された。参加者の語りから、本心を他者に受け止められ、自信を持つことが促されたと考える。自信を持つことは、就職活動の中で落ち着いて自己発信することにつながると考える。障害のある人々が本心で話し、その本心を他者から受け止められることで自己肯定が起こるという体験は、面接場面においても、自分の本心を話しても大丈夫という自信につながったのではないだろうか。もちろん、面接においては本心の伝え方などは検討する必要がある。しかし、本心を話しても大丈夫という自信は、結果として就職活動への前向きな姿勢や、面接で自信をもって話せることにつながる。また、本心を伝えることにより、人柄や価値観がよく面接官に伝わることで、ミスマッチを防ぐことが期待される。

このように、対話的ビブリオセラピーにおける文章作品が自己理解の感覚を促進し、また、文章作品を土台としたテーマのある対話が、自己肯定の感覚につながることで、就職活動への姿勢に影響することが仮説として示された。Pettersson (2018) において、対話的ビブリオセラピーが自信を高めることが示されているが、自己肯定については、対話的ビブリオセラピーの先行研究において扱われておらず、本研究特有の結果である。この特有性について

は今後更なる研究が必要であると考ええる。

4-2) 心理的負荷の軽減：創造的執筆・文章作品を通じた対話による気持ちの和らぎと活性化

プログラムの体験における、＜テーマのある対話＞や、＜自由な表現＞により生まれる＜楽しい雰囲気＞や＜現実を離れる＞によって気持ちの和らぎとして＜リラックス＞や＜安心＞、気持ちの活性化として＜モチベーション＞につながったことから、対話的ビブリオセラピーが就職活動の心理的負荷を軽減させることが仮説として示された。先行研究では物語による逃避がリラックスにつながることは示されているが（Usherwood & Toyne, 2002）本プログラムでは、文章作品を通じた対話や自由な表現、楽しい雰囲気により、気持ちの和らぎや活性化が見られた。

本プログラムが就労移行支援施設において＜安心＞できる場であったことは2つの側面から考察できる。1つは題材があることによる安心である。代表例となる語りから、障害の特性上抽象的な概念を理解しにくい参加者や、自由度の高いオープンな対話を苦手とする参加者がいたと考える。題材を明示し、文章作品という参考材料を示すことで、参加者の安心を担保したのではないだろうか。2つ目は自由に話せることへの安心感である。参加者の語りから、現実を離れて自由に表現できることが、リラックスすることにつながるという体験のプロセスが見られた。就労移行支援施設の利用者は、普段就職活動に向けて行動しなければならない、あるいは面接で正しく話さなければならないというプレッシャーが多いと感じられる。現実を離れ、自由な表現を促される環境設定で、正解にとらわれず想像力を働かせるプログラムに参加したことで、気持ちの和らぎを促進したと考える。

このように自由な表現を促し、楽しい雰囲気を持つ対話的ビブリオセラピーの体験は、気持ちの和らぎとともに、＜楽しみ＞や就職活動を行う＜モチベーション＞としての気持ちの活性化を提供したと考える。参加者の語りから、気持ちの活性化は、時にプレッシャーともなる就職活動を行うことへの前向きな気持ちを促し、心理的負荷を軽減することに

貢献することが仮説的に示された。就職活動によって心理的負荷がかかりやすい就労移行支援事業所の利用者に対して、対話的ビブリオセラピーは自由に安心して過ごせる場を提供し、気持ちの和らぎと活性化を促すことで心理的負荷の軽減に役立つことが仮説として示された。実際に心理的負荷が軽減されているかについては、本研究において示せなかったため、今後参加者の行動観察や質問紙データなどを活用した研究が必要であると考ええる。

4-3) 就労時に役立つ柔軟な捉え方の促進：文章作品を通じた対話による違いの受容

《柔軟な捉え方の促進》と《複合的要素》についての語りから、触媒としての文章作品により、‘優しく’引き出された意見について対話をすることが、‘違って当たり前’である文章作品に対する意見を自然と受け止める体験となり、違いの受容を促進することを仮説として示した。触媒としての文章作品の特徴（Hynes & Hynes-Berry, 2012）が、他者との違いの受容を促進しうることがわかった。違いの受容までのプロセスの中で、触媒としての文章作品は、優しく意見を引き出す機能を担っていた。この優しさは、誰も傷つけない、自然に浮かびあがるとも表現されていることから、触媒としての文章作品が優しさとして体験されたと考える。更に、文章作品を基にした対話は参加者に、グループメンバーの意見を違って当たり前であると感じる体験を提供した。正解のある対話ではなく、文章作品における対話は、違いを許容できる自由のある対話となることが示唆された。このように文章作品を通して意見を受け止め合う体験は、直接的な対話と比べて不安を感じにくいと考えられ、違いを受容する有用な手段の1つとなるのではないだろうか。

藤本・大坊（2007）が提唱したコミュニケーションスキルのモデル「ENDCOREモデル」が示す6種類のメインスキルに、他者受容が含まれており、違いの受容はコミュニケーションスキルの一つと考えられる。代表例から、SSTのようなコミュニケーションの練習自体を目的とした場と比較して、対話的ビブリオセラピーでは、他者の違いを自然に受け止める体験ができたと考える。このように直接スキル取

得を目的としない場で柔軟な捉え方の促進につながった体験は、自分の力でそのスキルを獲得できたという参加者の自信にもつながると考える。このコミュニケーションスキルとしての違いの受容は、就労後にも有用なスキルである。違いの受容が難しいと、業務への取り組み方の違いの受け入れが難しさや、違う価値観の上司や同僚との衝突につながりうるためである。このことから、対話的ビブリオセラピーを通した違いの受容という柔軟な捉え方の促進は、精神・発達障害者が就労する際の困難を軽減することが期待できる一つのスキルとなりうると思う。

4-4) 本研究の学術的意義と実践的意義

学術的な意義は、まず、就労移行支援事業所における対話的ビブリオセラピー体験について、各ワーク及び全体的な体験がどのように参加者の主観的変容に結びつくかについて詳細に初めて示したことである。量的データによって測定しえない、参加者の内的体験及び主観的変容の過程について理解を深めることができた。次に、対話的ビブリオセラピーが促進した参加者の変容から、対話的ビブリオセラピーの体験が参加者にどのように役立ちうるのか仮説的知見を示した。具体的にはプログラムが自己理解及び自己肯定の感覚を促進することを通して就職活動への姿勢の変容に影響すること、心理的負荷を軽減しうることを、柔軟な捉え方を促すことである。更に、仮説生成したことにより、就労移行支援における精神・発達障害者の対話的ビブリオセラピー体験の意味づけや効果について、今後の研究においても学術的意義である。

実践的意義として、対話的ビブリオセラピーを就労移行支援事業所において活用する具体的なセッションデザインを提示し、ルール設定や、文章作品の選定法、セッションの構造を示したことは、筆者以外による今後の実践に役立ちうると思う。更に、本研究における体験の意味づけから、今後、多様な形式やテーマで対話的ビブリオセラピーを活用する可能性を仮説的に示したと考える。例えば、対話的ビブリオセラピーを面接対策の一環として話す自信

をつけるプログラムや意識的に自己理解を進めることが難しい利用者を対象とした自己理解プログラムとして活用することである。このように就労移行支援事業所における一つの援助資源としての対話的ビブリオセラピーの活用可能性を示したことが本研究の意義と考える。

4-5) 本研究の限界と展望

本研究の限界として、概念化に至らず扱えなかったが改善点に関する語りもあった。今後プログラムにおける進行上の配慮や、文章作品選定やテーマの検討が望まれる。また、本研究は参加者の対話的ビブリオセラピー体験における意味づけを明らかにするという目的に応じて質的研究を採用したため、就労移行支援の利用者による対話的ビブリオセラピー体験の意味づけとしてみられた参加者の主観的変容については仮説の提示に留まり、客観的な視点から実際に参加者の行動や思考が変容したかについては明らかにできなかった。

本研究の展望として、対照群の設定や介入前後比較などの量的研究の手法を用い、プログラム実施による活動や通所率、思考や感情の変化について仮説検証することが望まれる。更に、障害特性上話することが困難な利用者や、インタビューに応じなかった参加者が存在したため、ワークシートの内容分析など、本研究において焦点を当てられなかった参加者の体験も収集できる研究デザインを検討する必要があると考える。

謝辞

本研究の参加に快諾頂いた研究参加者の皆様、また本研究においてご指導頂いた大阪大学野村晴夫先生に心より感謝申し上げます。

引用文献

- Combs, M. A., Canu, W. H., Broman-Fulks, J. J., Rocheleau, C. A., & Nieman, D. C. (2015). Perceived stress and ADHD symptoms in adults. *Journal of attention disorders, 19* (5), 425-434.

- Cooper, K., Smith, L. G., & Russell, A. (2017). Social identity, self-esteem, and mental health in autism. *European Journal of Social Psychology*, 47 (7), 844-854.
- 藤本学・大坊郁夫 (2007). コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み. パーソナリティ研究, 15 (3), 347-361.
- Golden, K. M. (2000). The use of collaborative writing to enhance cohesion in poetry therapy groups. *Journal of Poetry Therapy*, 13 (3), 125-138.
- Hirvikoski, T., & Blomqvist, M. (2015). High self-perceived stress and poor coping in intellectually able adults with autism spectrum disorder. *Autism*, 19 (6), 752-757.
- Hynes, A.M., & Hynes-Berry, M. (2012). *Biblio/Poetry Therapy: The Interactive Process, A Handbook*. Clearwater: North Star Press of St. Cloud, Inc. Third edition.
- Jones, R. M., Hansen, L., Moskvina, V., Kingdon, D., & Turkington, D. (2010). The relationship between self-esteem and psychotic symptoms in schizophrenia: A longitudinal study. *Psychosis*, 2 (3), 218-226.
- Karacan, N., & Güneri, O. Y. (2010). The effect of self-esteem enrichment bibliocounseling program on the self-esteem of sixth grade students. *Procedia-Social and Behavioral Sciences*, 5, 318-322.
- 厚生労働省 (2005). 障害者自立支援法. <https://www.mhlw.go.jp/topics/2005/02/tp0214-1c1.html> (2020年10月25日情報取得)
- 松為信雄・菊池恵美子 (2006). 職業リハビリテーション学改訂第2版. 協同医書出版社.
- 日本職業リハビリテーション学会 (2002). 職業リハ用語集 第2版. 日本職業リハビリテーション学会.
- Mazza, N. (1999). *Poetry therapy: Interface of the arts and psychology*. Crc Press.
- Myin-Germeys, I., van Os, J., Schwartz, J. E., Stone, A. A., & Delespaul, P. A. (2001). Emotional reactivity to daily life stress in psychosis. *Archives of general psychiatry*, 58 (12), 1137-1144.
- Orth, U., & Robins, R. W. (2013). Understanding the link between low self-esteem and depression. *Current directions in psychological science*, 22 (6), 455-460.
- Newark, P. E., Elsässer, M., & Stieglitz, R. D. (2016). Self-esteem, self-efficacy, and resources in adults with ADHD. *Journal of Attention Disorders*, 20 (3), 279-290.
- 小川勤 (2018). 発達障害学生のセルフ・アドボカシー・スキル育成に関する研究—移行支援における自己理解と仕事理解—. 大学教育, 15, 25-35.
- Pettersson, C. (2018). Psychological well-being, improved self-confidence, and social capacity: bibliotherapy from a user perspective. *Journal of Poetry Therapy*, 31 (2), 124-134.
- Rapp, C. A., & Goscha, R. J. (1997). *The strengths model: A recovery-oriented approach to mental health services*. New York: Oxford University Press.
- 田中英樹 (訳) (2008). ストレngthモデル——精神障害者のためのケースマネジメント. 金剛出版.
- Romm, K. L., Rossberg, J. I., Hansen, C. F., Haug, E., Andreassen, O. A., & Melle, I. (2011). Self-esteem is associated with premorbid adjustment and positive psychotic symptoms in early psychosis. *BMC psychiatry*, 11 (1), 1-8.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press.
- 佐藤郁哉 (2008). 質的データ分析法—原理・方法・実践. 新曜社.
- 澤田英三・岡田猛・光富隆・山口修司・井上弥 (1991). 大学から職場への移行. 山本多喜司・S. ワッブナー (編) 人生移行の発達心理学. 北大路書房, pp.205-222.
- 柴野武志・狩野志麻・高柳玲奈・瀬戸口裕二 (2016). 就労移行支援事業所におけるジョブコーチのノウハウを活用した就労準備プログラムの開発. 地域と住民: 道北地域研究所年報, 34, 67-72.
- 高橋美保・鈴木悠平 (2019). ライフキャリア・レジリエンスプログラムの開発と効果評価—障害者の就職と定着を目指して—. 教育心理学研究, 67 (1), 26-39.
- Usherwood, B., & Toyne, J. (2002). The value and impact of reading imaginative literature. *Journal of librarianship and information science*, 34 (1), 33-41.
- Van Dongen, C. J. (1996). Quality of life and self-esteem in working and nonworking persons with mental illness. *Community mental health journal*, 32, 535-548.
- 八木俊洋 (2018). 就労移行支援事業の現状と課題. 明星大学発達支援研究センター紀要: MISSION, 3, 83-91.
- 山下朋美 (2021). 対話的ビブリオセラピーの体験過程の検討 対人援助職を目指す大学院生のグループから. 質的心理学研究, 20 (1), 315-333.
- Yamashita, T. (2022). The experience of international students in interactive bibliotherapy: functions of interactive bibliotherapy helping in environmental transitions. *Journal of Poetry Therapy*, 36 (2), 114-130.

(2023. 10. 23 受稿) (2024. 8.30 受理)
(ホームページ掲載 2024年9月)